



教員特別研究(先進的研究)成果報告書 | 配分研究費: 215千円

戦前期農学者たちの経済思想・経済観に関する研究

目的・概要

経済学は、これまで世界共通の合理的経済人や発展段階論を想定し、文化・風土にかかわらず普遍的に成り立つ理論を追求してきた。他方で柏祐賢は、多様な農業のあり方を踏まえ、多様な「経済秩序」を考える学説を展開しようとした。これらを踏まえ日本・台湾を舞台に活躍した農学者・農業経済学者(田中長三郎、磯永吉、東畑精一、柏の弟子の李登輝ら)の経済思想・経済観に着目することで経済学の多様性を探究する準備作業としたい。

期間

令和6年4月1日～令和7年3月31日

研究担当者

文化政策学部 文化政策学科 教授 四方田 雅史(研究代表者)

スケジュール

令和6年6月	和歌山県の南方熊楠顕彰館・橋本神社での田中長三郎に関する資料調査
令和6年7月～8月 令和6年8月	台湾での報告のための資料分析、報告執筆 中央研究院台湾史研究所の国際学術交流で田中に関する報告を行い、台湾大学での田中・磯らの史料調査も
令和6年9月～12月 令和7年1月～3月	田中長三郎に関する調査・論文執筆 論文投稿・校正、磯永吉や李登輝の史料分析

研究成果

柑橘学・農学者として戦前台湾を舞台に研究・政策提言をした田中長三郎に着目した。研究の結果、田中の論考の中から、米国から伝わった「立体農業」論をめぐって、それを日本に紹介した賀川豊彦と田中の思想を比較する手法も使って検討した。彼の経済思想については、中央研究院台湾史研究所の国際学術会議で報告する機会を得、そこでいただいたコメントによって視点を豊かにできた。先述の「立体農業」は元々米国のダストボウルを背景としたものであり、そこでは比較的平坦な地形を前提としていたが、賀川や田中の前提とした日本・台湾にはそうした地形は少なく、農学者が対象とした風土や環境の違い、そして東アジアの労働集約的「園芸」と新大陸の大規模な労働粗放的農業の違いなどが意識されていたことも示した。



今後の研究成果の還元方法

田中に関する成果については、先述した中央研究院台湾史研究所での国際学術会議で令和6年夏に報告し、かつて非常勤をしていた武蔵野大学の『政治経済研究所研究年報』第24号に論文「柑橘学者・田中長三郎の経済思想・経済観―「立体農業」論と「山地開発」論を事例として」を掲載・発表した。本研究の出発点である柏の警咳に接した李登輝、蓬莱米の生みの親磯永吉、東畑精一などの資料・文献も集めることができたが、まだ本格的分析に至らなかった。計画年度内には成果として公表できなかったが、今後の課題として科研費などにも応募しつつ研究を進めていき、その成果を発表していきたい。